三重大学高等教育研究 2024, 第30号, 85－94頁

【論 文】

オンライン海外研修を活用した現地海外研修の意義と可能性†

－三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に－

奥田久春*・松岡知津子*2
三重大学全学共通教育センター*・三重大学国際交流センター*2

本稿は新型コロナ感染症拡大時に普及したオンライン海外研修の意義を活かし，海外渡航が可能になり再開されるようになった現地海外研修と組み合わせる可能性と課題を検討した．そのため三重大学の短期海外研修であるベトナムフィールドスタディがオンラインで実施されたときと現地研修として実施された両方に参加した学生の経験をインタビュー調査し，そこからオンライン海外研修に参加することがどのように現地海外研修への参加に結びついたのかを明らかにした．またオンライン海外研修と現地海外研修での経験の違いを比較することで，両研修の意義と課題を考察した．その結果，両研修の性質が異なることを認識しつつも，オンライン海外研修で得られた知識，自信や興味・関心，交流体験が現地海外研修の動機づけになるとともに，現地での活動で役立つものであること，オンライン海外研修の限界や課題を克服するための振り返りが必要であることも示唆された．

キーワード：オンライン海外研修，現地海外研修，ベトナムフィールドスタディ，国際共修

1. はじめに

1) 背景

高等教育の国際化に合わせて海外留学や研修，国際交流の機会が増えるようになってきた．また，留学の形態や参加方法も多様になってきている．例えば，現地に行かなくても参加できるオンライン海外研修（以下，オンライン研修と略）は，経済的や時間的に海外に行く余裕のない学生にも国際交流の道を開いたといえよう．また，国内にいる外国人留学生と共に学ぶ国際共修も注目を集めるようになった．そしてこの国際共修をオンラインによって海外にいる学生との共修を可能にした COIL（Collaborative Online International Learning）に対しても関心が高まった（池田，2016）．

とはいえ，実際に現地に行くことで得られる学びと比べることは難しく，必ずしもオンライン研修が主流となったわけではない．しかし，2019 年からの新型コロナ感染症拡大によって海外渡航がほぼ不可能になると，海外留学や研修を希望する学校や学生にとっての唯一の手段としてオンラインでの留学・研修や COIL が急増していった（新見他，2021）．

その後，新型コロナ感染症の懸念が和らぎ，海外渡航や帰国の制限が緩和されたことで，これまで中止や延期が余儀なくされていた海外研修が再開されるようになった（日本経済新聞, 2021 年 7 月 11 日）．あるいは，その間にオンラインによる海外研修に切り替えて継続していたプログラムは，現地海外研修（以下，現地研修と略）を復活させることが可能になった．

では，そのことでオンライン研修は傍流に置かれるのであろうか．そもそもオンラインによるプログラムは新型コロナ感染症が拡大する以前から実施されていたことからも，海外渡航が不可能な場合の代替としてではなく，例えば経済的負担の少なさや「サードプレイス」での学びなど，それ自体の価値や意義があるはずである（村田，2022）．このため，オンライン留学がリアル留学の再開後も残ることを述べている報道（東洋経済 ONLINE，2021 年 7 月 11 日）もあり，それぞれの価値を認めながら共存することが予想される．

しかし，こうしたオンライン研修の意義を認めつつも，海外渡航が可能になったことで現地研修を実施するのであれば，単に以前の方法に回帰するのではなく，オンラインによって学生が得る経験や知識，その意義を活かした現地研修を検討することも必要なのではないだろうか．すなわち，オンラインか現地かという 2 項対立や選択肢として捉えるのではなく，お互いを融合させることができないだろうか．

2) 先行研究・取り組み

オンライン研修と現地研修の組み合わせは，コロナ禍においても語られたことがある．例えば，オン

ライン留学で語学研修を進めておき，渡航制限が緩和された後の海外留学に備えるというハイブリッド型留学が提唱された（留学ジャーナル，2021 年 8 月 31 日）．しかし，オンライン研修と海外研修が共存する中でのハイブリッド型ということではなかった．

共存という点では，新見他（2021）はコロナ禍で広まった様々なオンライン研修の経験を踏まえ，ポストコロナに向けて ICT を活用した国際教育交流について論じている．この中で，多様な留学・研修制度を挙げながら現地研修とのブレンディッド（またはハイブリッド）の構想の議論を紹介している．また，現地研修ありきではなく、ICT を活用することで，効果的な海外研修にすることを提言している．

ハイブリッド型に関しては，小松（2022）はポストコロナつまり with コロナでの異文化間交流活動として，COIL に加えてハイブリッド形式の交流活動について触れている．但し，これは主に国内での交流活動を対象としている．

このように，オンライン研修を活用する議論や取り組みの萌芽が見られるが，海外研修が復活したポストコロナの中で，具体的にどのように活用するのかという研究はまだ進められていないと思われる．

また，オンライン研修と現地研修を組み合わせるためには，それぞれの特質や意義を分析し，活用のありかたを検討することが求められよう．奥田・松岡（2022）は三重大学が行っているベトナムフィールドスタディ（以下，VFS と略）を事例に，オンラインを活用したプログラムでの学生の学びが，従来の現地におけるプログラムとどのような点で異なるのかに着目し，オンラインでの国際共修の可能性と課題を考察している．そこでは，オンラインであっても，自文化と異文化の相違を認識することができたことなど国際共修の成果を見出している．また，SNS や画像・動画を用いて私生活などを紹介しあうことで，国際交流を深める可能性があることも見出している．一方で，オンラインのプログラムでは文化間の相違について深く理解することやコミュニケーションの時間的，空間的な制約から，互いを知るためのタスクが更に必要であるという示唆も導き出した．このように，オンライン研修の可能性と課題は考察できたものの，それらを現地研修にどのように活用することができるのかについては，まだ分析や考察を行っているわけではない．

3)　研究の目的と方法

本研究の目的は，オンライン研修と現地研修の意義と課題を分析することで，両方をどのように結びつけることができるかを導き出すことである．研究の対象となる事例は，コロナ禍のオンライン研修から現地研修が復活し始めた時点に見出せよう．

前述の VFS では，2020 年度と 2021 年度はオンラインによるプログラムが実施されていたが，2022 年度に 4 年ぶりにベトナムを訪問する海外研修プログラムとして実施された．

そのため，この VFS を事例として，オンライン研修と現地研修の両方に参加した学生を対象として，それぞれの研修プログラムでの体験から意義と課題を分析する．そのことでオンライン研修の特徴をどのように活かすことができるのか，どのような課題があるのかを考察し，オンライン研修の機能を組み込んだ現地研修の可能性を導き出したい．

本稿では，まず VFS の概要を述べ，2020 年度，2021 年度のオンライン研修と 2022 年度の現地研修との違いを整理した上で，どちらにも参加した学生へのインタビュー調査の回答を分析し，オンライン研修と現地研修の意義と課題を抽出する．そして，オンライン研修の現地研修への活用の可能性を考察する．2020 年度と 2021 年度の 2 年度分のオンライン研修を取り上げるのは，それぞれ別々に参加した学生が 2022 年度の現地研修に参加したからである．

2. VFS の特徴

1)　VFS の目的と概要

VFS は異文化にあって主体的に行動し，参加メンバーと協力しながら活動を進め，積極的にコミュニケーションを図ろうとするグローバル人材に求められる能力・資質を育成することを目的とした短期海外研修プログラムである．三重大学の協定大学であるホーチミン市師範大学の日本語学部との交流として 2010 年に開始され，毎年実施されている．当初からホーチミン市師範大学の学生と協働によるフィールド調査を実施することが主な内容であり，参加型の研修を特徴とするものであった．いわば海外での国際共修である．

2018 年度まで現地研修として実施されていたが，2019 年度は事前勉強会の段階で新型コロナ感染症が拡大し，中止を余儀なくされた．2020 年度も当初は新型コロナ感染症の緩和を望み，現地渡航による研修の実施を予定して参加学生の募集を行ったが，渡航 3 か月前になってもベトナム入国自体が不可能であることとホーチミン市師範大学も対面による授業を行っていないことが判明し，中止するかオンラ

インで実施するかの判断をすることが迫られた．当時の参加学生に意向を確認し，Zoom を用いたオンライン形式で 2021 年 3 月 8 日～12 日の 5 日間で行うことができた．もともと VFS は海外における国際共修であることから，オンラインでの実施は COIL の要素を含むものとなった．しかしながら，このように現地渡航が可能かどうか不確かなものであったこともあり，参加学生は 4 名に留まった．ホーチミン市師範大学からの参加者は 9 名であり，日本語能力のレベルも多様であった．

2021 年度は当初からオンラインでの開催とし，募集案内でも通知したことから応募者が集まりやすかったのか，16 名もの参加者を得た．ホーチミン市師範大学からの参加者は，日本語能力の多様な 24 名である．2022 年 3 月 7 日～11 日の 5 日間で行った．

2022 年度からは三重大学教養科目「国際理解実践（海外フィールド研修）」として開講されたことから参加者募集と併せて通常の科目履修登録により，16 名の学生が参加することとなった．現地への渡航が可能と判断して募集を行ったことも多くの学生の参加を得た要因として考えられる．ホーチミン市師範大学からの参加者は 20 名であり，例年と同様に日本語能力は多様であった．また日本学生支援機構（JASSO）による奨学金を得ることができ，授業化したこともあり，現地での日程を長くして，3 月 5 日～14 日の 10 日間で行った（表 1）．

表 1．各年度のプログラムの特徴

年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
形式	オンライン（Zoom）	オンライン（Zoom）	現地訪問
日数	5 日間	5 日間	10 日間
参加者（ベトナム側）	4 名（9 名）	16 名（24 名）	16 名（20 名）
本稿で対象とする参加学生	1 名	3 名	4 名

2)　各研修プログラムの内容

これらはいずれも以下の 3 点の内容から構成されている（3 年間の研修プログラムを表 2～4 に示す）．

1 点目はホーチミン市師範大学の学生との日本語とベトナム語の相互学習である．2020 年度と 2021 年度のオンライン研修では Zoom のブレークアウトルームの機能を用いて，ランダムに日本側とベトナム側の学生を交えた 4～5 名のグループ分けを行い，日本語とベトナム語の挨拶や発音をお互いに教え合った．また教員が日本のことわざの例を紹介してから，ブレークアウトルームに分かれ，日本のことわざを紹介し，ベトナムにも同じようなことわざがあるか確認し合った．擬態語・擬音語についても同様に，日本側学生が音をどのように聞こえるかを説明した．

表 2．2020 年度の VFS（オンライン研修）日程

日程	内容
1 日目 午後	午後：開講式 各グループ，フィールド調査（2 時間）
2 日目 午後	日本語・ベトナム語教え合い①（30 分） 各グループ，フィールド調査（2 時間）
3 日目 午後	日本語・ベトナム語教え合い②（30 分） 各グループ，フィールド調査（2 時間）
4 日目 午後	日本語・ベトナム語教え合い③（30 分） 各グループ，発表準備（2 時間）
5 日目 午後	日本文化紹介・最終発表 各グループ　5 分間の日本文化紹介 最終発表（15 分+10 分質疑応答） 修了式

表 3．2021 年度の VFS（オンライン研修）日程

日程	内容
1 日目	午後：開講式 フィールド調査（2 時間）
2 日目	午前：フィールド調査 午後：日越文化紹介①　三重①（40 分） 日本語・ベトナム語相互学習①（20 分） フィールド調査（2 時間）
3 日目	午前：フィールド調査 午後：日越文化紹介②ベトナム（60 分）
4 日目	午前：フィールド調査 午後：日越文化紹介③三重②（60 分） 日本語・ベトナム語相互学習②（30 分） フィールド調査（2 時間）
5 日目	午前：発表準備 午後：最終発表準備 最終発表（12 分発表+3 分質疑応答） 修了式

2022 年度の現地研修では，教室でベトナム側の学生と隣同士や前後左右の 4 人で会話できるよう自由

に着席してもらい日本語の授業を実施した．擬態語については，日本側の教員がドアの音など日本語ではどのように聞こえ，どのように表現するか具体例を説明した上で，日本側の学生がいろいろな擬態語を紹介してベトナム側の学生がどのように聞えているのか確認し合った．また，同様に日本側の学生が日本語のことわざを紹介し，ベトナムに共通のことわざがあるかどうか話し合った．

オンライン研修とは異なり，現地研修ではベトナム語の授業が別途設けられ，教室にてベトナム側の学生が数の数え方や簡単な会話方法などを解説し，そうした単語や例文を日本側の学生とベトナム側の学生がペアになって練習したり，全体の前に立って発表したりするという形で行われた．

表 4.　2022 年度の VFS（現地研修）日程

日程	内容
1 日目	午前：中部国際空港出発 午後：ホーチミン市着
2 日目	午前：開講式 午後：フィールド調査（2 時間）
3 日目	午前：フィールド調査 午後：三重紹介①（60 分） ベトナム語学習（60 分）
4 日目	終日：フィールド調査
5 日目	午前：フィールド調査 午後：日本語学習，三重紹介②（90 分）
6 日目	午前：発表準備 午後：高校，技能実習生日本語センター訪問
7 日目	午前：短期大学訪問 午後：戦争証跡博物館，統一会堂見学
8 日目	メコンデルタ観光（自由参加）
9 日目	午前：最終発表（15 分+10 分質疑応答） 修了式 午後：ホーチミン市発
10 日目	午前：中部国際空港着

2 点目は参加学生が設定した探究テーマに沿ってホーチミン市師範大学の学生と協働するグループを作り，調査を実施し，発表することである．

具体的には 2020 年度は「教育」「農業」の 2 つのテーマのグループを編成した．ベトナムに行くことがないため，日本側とベトナム側がそれぞれ日本の事情とベトナムの事情を調べて持ち寄り，双方を比較する形で探究を行うこととした．新型コロナ感染症拡大のため，外出して調査することはできず，日越お互いにインターネット等からの情報収集が主な調査方法となった．最終日を除く毎日午後の 2 時間，Zoom のブレークアウトルーム機能を用いて探究内容や方法を話し合い，役割を決めて調べた内容を紹介しあいながら，議論をまとめる形となり，最終日に Zoom での発表会を行った．

2021 年度も同様の形で行われたが，プログラム時間外の午前中も各グループで活動を行うことを推奨したり，最終日の発表会の前にグループで最終確認を行う時間を設けたりしながら，フィールド調査のための交流の機会を多く取るようにした．参加人数から「スポーツ」「教育」「環境」「儀礼・習慣」「食文化」の 5 つのテーマのグループを編成した．

2022 年度の現地研修でのフィールド調査では，「食品」「食文化」「教育」「環境」「音楽」の 5 つのテーマに分かれてグループを編成し，また渡航前の事前勉強会にてベトナム側の学生とグループを編成して，Zoom を用いたオンライン交流会を開催した．これは主に自己紹介が目的であったが，調査の内容や方法を話し合うグループもあった．現地に着いてから再会する形となり，開講式終了後すぐに調査の内容などを話し合い，ベトナム側の学生とともにホーチミン市の街中に出かけ，日系企業の食品工場を見学したり，小学校を訪問して授業観察や教員へのインタビュー調査をしたり，他にも，衣類の店や楽器店，飲食店を訪問して商品を調査したり，博物館にて情報収集をしたりした．また，アンケート調査なども行われた．最終日に発表会を行い，ベトナム側の学生とともに各グループが順番に教室の前でパワーポイントを用いて発表した．

3 点目は日本文化や三重の文化を紹介する活動である．2020 年度は一般的な日本文化から個々人がテーマを決め，「日本の出汁」「日本の年中行事」「日本語の方言」「和菓子」の紹介を行った．発表は Zoom を通してベトナム側学生一斉に対して行われ，フィールド調査の最終発表の前に一人 5 分を割り当てた．

2021 年度には学生にとって身近な三重の文化を紹介する活動に切り替えた．ベトナムから交換留学生として三重大学に来てもらいやすくすることや三重大学生が三重のことを知る機会にもなることも狙いであった．また希望するテーマから「鳥羽・志摩」「伊勢神宮」「鈴鹿」「伊賀」「津・大学生活」のグループを編成して，事前に話し合い，分担しながらパワーポイント資料を作成した．深く調べるために実

際に訪問して調査することを予定していたが，新型コロナ感染症の再拡大のため実施できず，インターネット等での調査となった．その発表は 2021 年度も Zoom を通して行われ，グループごとに，10 分程度ベトナム側学生に対して一斉に行ったが，5 グループ分あるため，2 日間に分けて行うこととした．

2022 年度の現地研修でも三重文化紹介を踏襲し，希望するテーマから「伊勢神宮」「VISON」「熊野」「津・大学生活」のグループを編成した．また実地調査も可能となったため，実際に三重の各地を訪問し写真や動画を撮ったりして，発表資料を作成した．発表はワークショップ形式で行われ，4 つのグループが 4 カ所に分かれ．その周りにベトナム側の学生に集まってもらい，1 カ所を 20 分程度で紹介して，4 カ所をローテーションするという形である．これを 2 クラス分，曜日を変えて行った．

これらの 3 点の共通するプログラム以外に，オンラインならではのプログラムもあった．現地を実際に体験できない代わりに参加者が食事風景や生活圏，店舗，周辺の風景などを写真や動画で紹介しあうプログラムである．これは特別に時間を設けたわけではなく，フィールド調査の時間帯に各グループで行ったり，プログラムの時間外で各自が SNS を使って写真を送り合ったりする形で行われた．

3)　オンライン研修と現地研修の特徴

このように 3 つのプログラムで共通しているのは，いずれもベトナム側の学生との協働的な活動が多く，COIL の学習モデルである「互いを知り合うためのタスク」「互いの国や文化を知るためのタスク」「協働して何かを作り出すタスク」（池田，2016）や国際共修としての要素「意見交換，グループワーク，プロジェクトなどの協働作業を通じて学習者が互いの物事へのアプローチやコミュニケーションスタイルから学び合う」（末松他，2019）内容を含めていることである．これらはただ授業を受ける学習体験ではなく，相手の学生との協働的な活動を進めるためのスキルが必要となってくる．オンライン研修を経て現地研修のプログラムに参加した学生はこうした活動への取り組み方を分かっていたことになる．

一方で，オンライン研修と現地研修の大きな違いは日数である．現地研修では日数を長くした分，先述した共通のプログラム以外に施設の見学や他校との交流などを入れることができた．またオンライン研修では主に午後の活動であったが，現地研修では午前から午後に亘って終日，活動を行えていることである．また，オンライン研修では日本語とベトナム語を同時間帯に相互に教えあうという形で進められたが，現地研修では両者を別日程に分けて行うことができたことなど，交流の機会を多くすることになった．このことは現地研修に参加した学生にとって充実した体験をもたらすことになる．一方でオンライン研修においては先述の「サードプレイス」としてお互いが対等に経済的，心理的負担がなく学ぶことができるという特徴を持たせている．こうした点を踏まえて，参加学生の体験についてインタビュー調査を行い，回答を分析していきたい．

3. 調査の概要

本稿ではオンライン研修と現地研修の意義と課題を明らかにすることを目的として，VFS のオンライン研修（2020 年度，2021 年度）と現地研修（2022 年度）の両方に参加した学生を対象として，参加した動機，現地研修ならではの経験，オンライン研修ならではの経験，オンラインでの経験が現地研修で役立ったこと，コミュニケーション方法の違い，プログラム時間外の交流についてインタビュー調査を行った．調査対象者は 4 名（1 名が 2020 年度，3 名が 2021 年度に参加した学生で，この 4 名が 2022 年度の現地研修に参加した）である．インタビュー調査は 2023 年 10 月 2 日，5 日，12 日の 3 日間に一名ずつ 40 分程度で行った．調査方法は対面による半構造化インタビューを用いた．調査を開始する前に調査の目的，目的外での不使用，匿名の厳守，記録の保存と研究終了後の破棄について説明の上，了解を得た．半構造化インタビューの主となる質問項目を次のとおり設定した．

1. どうして 2 回目（現地研修）に行こうと思いましたか？
2. 現地訪問だったからこそ，経験できたことは何ですか？
3. オンラインだからこそ経験できたことは何ですか？
4. 現地訪問に参加した際に，既に過年度にオンラインで経験しておいてよかったことは何ですか？
5. 現地訪問で経験できなかったことは何ですか？
6. オンラインだったときと現地訪問でコミュニケーションの取り方にどのような違いがありましたか？

表 5.　インタビュー回答（要約）

質問項目	学生 A （教育，教育）	学生 B （儀礼・習慣，教育）	学生 C （教育，環境）	学生 D （環境，環境）
1．オンライン参加後に現地研修に参加した動機	もともとオンラインよりも現地研修に参加を希望	オンラインは手軽であり，ベトナムの友達ができて会いたいと思った	オンラインで喋った経験から，ベトナムの雰囲気を実際に感じたいから	オンラインで交流ができ実際に会おうと思ったから
2．現地研修だから経験できたこと	会話の幅 雑談のしやすさ 会話の場面・人数 相手の反応 相手の優しさ 経験からの知識 様々な場面の会話から調査に繋がる 相手の身近さ	日本語が苦手な学生との会話 会話の幅 会話のしやすさ 細かいフィールド調査.	ベトナムの実感 計画にないことに対応する力. 好奇心 相手の日本語への理解 相手の反応や雰囲気から会話が繋がりやすい	仲を深めやすい 相手に助けられる ベトナム語学習への意欲 相手の生活や性格への理解 実体験 情報の質や量
3.オンラインで経験できたこと	ベトナムの情報. スムーズな調査. 生活の周囲を写真などで紹介.	手軽な参加. 脱線せず集中してスムーズに進められた調査.	計画通りの調査. オンとオフ. 発表資料のベトナムらしさ.	時間の有効利用 相手の優しさや積極性を感じた.
4.オンラインで経験しておいてよかったこと	得ていた知識から現地でその知識を深められた. 相手の上手な日本語レベルを知った.	現地に行くハードルが下がった. 更に知りたい. ゆっくり話す経験や言葉が通じない時の方法. 話題が広がる.	ベトナムの知識を得ていたこと.	ベトナムの知識が会話に繋がる. 現地に行く自信. ゆっくりと話すこと.
5.それぞれのコミュニケーションの違い	どちらも話し方やリアクションを意識.（オ）では特に相手の表情をよく見て，自分の表情も意識した.	（オ）一人ずつ話すため，全員が話せるように意識する.（対）思いつくまま同時に話せるし，話を聞ける	どちらも写真や翻訳機を使う.（オ）チャットなどで文字が多い. 伝わらないと諦める.（対）では繰り返し述べるなどして伝え切る.	どちらもゆっくりと話をした. （オ）通じない場合はチャット機能を使った. 三重紹介では内容を伝えるより，スライドを発表する意識.
6.プログラム時間外の交流	（オ）文面で発表に向けた連絡（対）一緒に食事に行った．グループメンバー以外の人とも交流できた	（オ）LINE での連絡.（対）食事や土産店など一緒に行った。	（オ）LINE やインスタグラムを交換し写真を送りあったりした.	（オ）発表資料作成の連絡.（対）一緒に食事に行った. グループメンバー以外とも交流できた.

（オ）オンライン，（対）現地研修での対面

これらの項目を順不同で質問したり，繰り返し質問したりして回答を得た．回答を文字化した上で，上述の項目に沿って整理し，ポイントを抽出した．キーワードをもとにまとめたものが表 5 である．

4. 結果・分析

1）動機づけ

まず，質問 1 のオンライン研修に参加した上で，更に現地研修に参加した動機については，もともと現地研修を希望していた 1 名（学生 A）を除き，オ

ンライン研修がきっかけになっていた．特に「ベトナムに興味があったわけじゃないんですが，海外の大学生と交流できる機会もなかったので，オンラインは手軽だし」という気持ちから参加し「オンラインで友達ができたので，その方に会おうと思って」（学生 B）という回答からそのことが窺える．同様に，「ベトナムだからというわけじゃないんですが，海外とか興味があったので，オンラインでインスタを交換したりして実際に会ってみたいなと思って」（学生 D）という回答に見られるように，海外との交流に何らかの関心から参加したオンライン研修が友達を作ることに繋がり，そのことが現地研修への参加動機になっているケースが見られた．

動機は参加に向けたものだけでなく，現地での活動に繋がっているものもあった．例えば，「同じグループだった子が Zoom のカメラで家の中とか外とか見せてくれて，喋ってるだけじゃなくて雰囲気も見せてくれたので，なんかそういうの見ると本物を知りたくなりました」（学生 C）や「現地で食べられる（ベトナム）料理があると思った」（学生 D）というように，オンライン研修によって関心を広げたケースも見られた．

2)　オンライン研修の効果

オンライン研修が現地研修に役立ったという例もある．例えば，もともと現地研修が希望（学生 A）であったことからオンライン研修が動機になったわけではないが，質問 4 についての回答から「（オンライン研修でのフィールド調査の経験から）教育のフィールドスタディでちゃんと知識を深められた」ことや「他のグループから聞いたフィールド調査とかあって，何も知識がないよりかそういうのあった方が」と述べており，オンライン研修が役立っていることが窺える．特にフィールド調査のテーマが「教育」などの場合は，制度や学校の運営など，学校訪問だけでは理解が難しいこともあり，日本では文献や情報が乏しいこともあるため，事前にオンライン研修で知識を得ておくことで，現地研修での調査が有意義なものになると考えられる．

他にも，オンライン研修で経験できたことが現地研修で役立っている点が見られた．例えば「テト（ベトナムの旧正月）について知っていたから，ベトナムの子が会話でテトって言っていても何のことか分かった」（学生 D）やオンライン研修の際の事前勉強会で「ベトナムの正月について勉強していたから，（現地で）ちょっと訊いてみたりして会話が広がった」（学生 B）というように，ベトナムの知識によって現地の交流を円滑に進められる例が見られた．テトはベトナムの人にとっては当たり前の行事であり，ベトナムの人と会話を進める上で知っておいた方がいいものである．「（ホーチミン市師範大学の）日本語学部の学生が日本のことを勉強しているように，私たちもベトナムのことを知っておけたら」（学生 A）というように対等な交流にも繋がると考えられる．

また，こうした知識だけでなくベトナムの人とのコミュニケーションの取り方にも影響を与えていることが分かった．例えば「（オンラインでも現地でも）ゆっくりと話すようにした」（学生 D），「日本語をゆっくり話す経験をしていたからスムーズにできた」「言葉が通じていないときに（オンライン研修でも）写真で見せたり，ひらがなで書いたりしていたので」（学生 B）や，「（オンライン研修で）日本語が上手だなと分かった」（学生 A）というような経験を既にしていたことが現地研修での交流に役立っていた．

こうした効果は「ベトナムの様子とか教えてもらえたりしたんで，多分（ベトナムにいきなり行くという）ハードルが下がった」（学生 B）というように，前節の動機づけにも繋がっていると捉えられる．

更に，オンライン研修終了後も SNS での交流が続き，そのことで「ベトナムについて知れたからベトナムに行けたし，自信が付いたというのもある」（学生 D）というように，その後の交流へと繋がることで，現地研修に参加する自信を持たせ，ハードルを下げる効果があることが分かる．

このように，オンライン研修は動機付け以外にも事前の知識の習得，コミュニケーションの工夫、自信の付与という意味で現地研修に参加する際に寄与していることが分かる．

3)　現地研修の意義とオンライン研修の課題

現地研修については，4 名ともインタビュー中に質問 2 への回答が多くを占めており，またそれ以外の質問への回答の中にも現地研修で得られた経験の話題が多く見られた（表 5）．オンライン研修の場合は PC の画面上での交流となるが，現地研修では活動の場が広がり，多様な交流や経験が可能となる．奥田・松岡（2022）がオンライン研修と現地研修の参加者の学びの違いを指摘していたように，現地での研修の方が「コミュニケーションの機会が多かったことから，文化間の相違を深く認識できていた」ということとも一致する．

なお，これらからオンライン研修より現地研修の

方が充実した研修であったように思われるが，現地研修でもオンライン研修でも経験できていたこともある．例えば「ベトナムの人が頑張って積極的に日本語を喋ろうとしてくれている」ことに気付いていた（学生 D）ことや，「ことわざを教えるのはオンラインでも楽しめた」(学生 C) ことから分かるように，オンライン研修でも一定の効果は見られる．また，現地研修では発表資料を一つの PC 画面を囲んで一緒に作成していたが，オンラインであっても Google などファイル共有の機能で協働して作成できていた（学生 C)．これらの経験や楽しさが現地研修に参加する際にも役立っていた可能性も考えられよう．

一方で，オンライン研修ならではの強みもある．「調査は脱線することなくスムーズに進められた」「調査の焦点を絞りやすい」「調査内容をじっくりと話すことができた」（学生 B）や「最初に決めたことを最終発表でできたし計画通りに進められた」(学生 C）というように，フィールド調査に集中できたことが分かる．しかしこれは弱点でもあり，質問 2 の現地研修だから経験できた回答として挙げられていた「実際に街で見たことを発表に入れる」(学生 C)，「現地での経験から得た具体的な事柄を調査の発表に使えた」(学生 D）ことや「調査に直接関係なくても発表に繋がるような話を聴ける」(学生 A)，「細かいことも突っ込んで訊いたり，いろいろなことを見学して気付いたりするなど深めることができた」(学生 B）ように，脱線するけれどもそこから調査が広がることがオンライン研修ではできていなかったことの裏返しでもある．また，現地研修ではコミュニケーションの機会が多く，お互いに内容を理解していることを確認しながら進められたり，実際に見学したりして，内容を十分に理解して発表することができるが，オンライン研修では時間や通信上の制約，一人ずつしか話せないという状況から「意味を伝えきれないと，諦めてしまいがち」(学生 C）だったり「インターネットとかで調べたことをなんとなく納得して発表」(学生 D）してしまったりしたことが見られた．この例にあるようにフィールド調査のテーマが「環境」であったり，「文化」であったりすると，現地に行かないと具体例や細かい問題が分かりづらく，調査内容が抽象的なものになる可能性がある．

このように現地研修の意義から，オンライン研修での課題や限界が見えてくる．これは質問 6 のプログラム時間外の交流にも表れている．現地研修では，「夜まで一緒にいて食事に行ったり，お土産の店に連れて行ってもらったりした」(学生 B）こと，「グループメンバーの先輩の人に食事に案内してもらった」(学生 A，同様の内容は学生 D）ことなどプログラム外での多様な交流が可能であったことが分かる．

一方で，質問 3 であったように「オンライン研修だからできた経験」として挙げられていた「スムーズな計画通りの調査」(学生 C）は，「発表しないといけないから」(学生 B）というようにフィールド調査の最終発表が交流の目的になりやすく，そのため時間外の交流でも発表資料の作成に関する連絡が主になっていた（学生 A，学生 B，学生 D）ことが読み取れる．オンライン研修では，目的とそのための活動が分かりやすいものの，多様な交流が行えない限界が存在する．

4)　オンライン研修と現地研修の異種性

オンライン研修での経験が全て現地研修に役立つものではないこともある．質問 5 にあるように，現地研修とオンライン研修の違いとして明らかに分かりやすいのがコミュニケーション上の工夫である．これはフィールド調査だけでなく，日本語・ベトナム語の教え合いでも見られる．オンライン研修では言葉が通じない場合は，Zoom のチャット機能や LINE などで文字情報に頼りやすい（学生 C，学生 D)．また画面上から相手の反応を判断するため，相手が理解しているか確認するために「画面に映る自分の表情や相手の表情をよく見ていた」(学生 A)．また Zoom などでは一人ずつ話さないと聞きづらくなるため，「全員に（発言を）回せるようにした」(学生 B）など，現地研修における対面でのコミュニケーションとは異なる工夫が必要となる．

対面での会話であれば，「同時にいろいろな人が会話できる」(学生 B) ため，会話の幅が広がったり「日本語が苦手な学生に声をかけたり」(同）できる．それほど会話していなくても「いつも身近にいてくれる学生」の存在に気付くこともある（学生 A)．例えば，三重紹介では相手のリアクションが伝わってくるので，説明しやすかったことや，普段の会話において，「目の前にあるもの（視野に入る多様な情報）から会話ができた」(学生 B）こと，日本語・ベトナム語の教え合いでも「雰囲気から自然な会話に近い教え合い」(学生 A）ができていた．

こうした違いは，様々なオンラインの通信方法（マルチモーダル）を用いることで，ある程度克服できるが，むしろ現地研修とオンライン研修は異なるコミュニケーションの性質を持つと考えられる．

5. 考察－まとめにかえて

以上のインタビュー調査の分析からオンライン研修と現地研修の意義と課題を整理していきたい．まず，オンライン研修が現地研修に参加するための動機に繋がったケースを見てきた．もちろん，オンライン研修に参加した学生の大半以上は現地研修には参加していない．そこには様々な理由が考えられるとしても，オンライン研修が必ずしも現地研修への参加に結びつくものではない．しかしながら，オンライン研修で得られた友人や経験が，現地研修を志向する動機になりうることが見えてきた．そして，オンライン研修で得られた知識，コミュニケーションの工夫，自信が現地研修において有効に活用されるという可能性と意義を窺うことができた．

オンライン研修よりも現地研修の方が活動の幅が広がり，多様な経験ができる．それだけでなく，現地研修では目的以外の経験が結果的に成果に還元されるという意義があると捉えることができる．こうした現地研修の意義があるが，何らかの予備的な経験なく，参加することは学生にとってハードルが高いという課題も確認できた．

逆にオンライン研修では参加しやすいという意義は学生も感じている．そして目的に向けた活動に集中しやすい．しかしながら，それ以上の活動を行うことが難しいことは課題として見いだせた．

また，オンラインでのコミュニケーションには対面とは異なる性質があり，オンライン研修の経験が全て現地研修に繋がるものではないことを認識しておく必要があることも示唆された．

これらの限界と課題を前提にしながら，オンライン研修の意義を有効に活用することで，現地研修の意義を効果的にできるのではないだろうか．

では，具体的にどのようなオンライン研修を行えば，効果的な現地研修を実施することができるのか，その可能性を考察していきたい．まず，現地研修に結びつけるには，オンライン研修で完結させないことが必要となってくる．そのためには，オンライン研修に参加した学生に成果を振り返ってもらい，得られた経験や知識，コミュニケーションの工夫，自信を次に活かすよう考えさせることで，現地研修への動機付けにすることが可能になるのではないだろうか．その際には，上記の限界と課題を認識して，それを克服することを意識させたり，現地での多様な交流を想像させたりすることも必要であろう．

更に具体的に言えば，オンライン研修では，学生は与えられた活動内容に集中しやすいが，そうした効率性に満足させるのではなく，多様な偶然性に関心を持たせる必要があると考えられる．そのためには，オンラインでの相手の学生との交流を通じて，その国の文化や生活，行事，制度などの知識や情報，雰囲気を会話やライブ映像などから触れられるようにすること，その上で，現地研修での多様な経験に期待を抱かせるよう進めていくことが必要だと考えられる．

忘れてならないのは，オンライン研修での交流だけでなく，SNS の交換や友人を作ることなどの仕掛けづくりをすることも現地研修への動機づけに繋がる可能性があることである．

現地研修を効果的なものにするために，オンライン研修の成果を発展させたり深めたりすることが重要になってくる．そうした目的意識を持たせることも必要だろう．そのためにも，学生には交流活動を振り返らせることが求められるのではないだろうか．

このように，オンライン研修（事前勉強会でのオンライン交流であっても），その意義を有効に活用することで，効果的な現地研修に繋げる可能性が考えられるのである．

参考文献

池田佳子（2016）「『バーチャル型国際教育』は有効か」，日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』67, 1-11.

奥田久春・松岡知津子（2021）「海外研修の知見を生かした国内での国際共修の可能性」『三重大学高等教育研究』27，85-88.

奥田久春・松岡知津子（2022）「オンライン海外研修での国際共修の可能性と課題－三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に－」『三重大学高等教育研究』28，63-66.

小松翠（2022）「日本の大学におけるオンライン異文化間交流活動の実践」異文化間教育学会『異文化間教育』56，32-46.

新見有紀子・星野晶成・太田浩（2021）「ポストコロナに向けた国際教育交流」日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』120, 26-41.

末松和子（2019）「はじめに」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編著『国際共修』東信堂，ｉ-ⅵ.

東洋経済 ONLINE「オンライン留学がリアル留学の再開後も残る訳」2021 年 7 月 11 日記事，(https://toyokeizai.net/articles/-/439808?) 2023 年 10 月 27 日閲覧.

日本経済新聞「海外留学，再開の動き」2021 年 7 月

11 日 web 記事,
(https://www.nikkei.com/article/DGKKZO73769980Q1A710C2EA1000/) 2023 年 10 月 27 日閲覧.
三重大学国際交流センター（2021）『2020 年度ベトナムフィールドスタディ報告書』
三重大学国際交流センター（2022）『2021 年度ベトナムフィールドスタディ報告書』.
三重大学国際交流センター（2023）『2022 年度ベトナムフィールドスタディ報告書』.
村田晶子・佐藤慎司（2022）「オンラインの国際協働学習の意義」村田晶子編著『オンライン国際交流と協働学習』くろしお出版，3-25.
留学ジャーナル「日本でオンライン留学から始めて海外へ留学！『ハイブリッド型留学』で学びをスタート」2020 年 9 月 18 日公開，2021 年 8 月 31 日更新記事,
(https://www.ryugaku.co.jp/column/2020/09/hybrid1.html) 2023 年 10 月 27 日閲覧.

SUMMARY

This paper considers the significance of the collaborative online-international learning, which became popular during the COVID-19, and examines the possibilities and challenges of combining it with the on-site international learning, which has resumed as overseas travel becomes possible. To this purpose, we conducted interviews with students who participated in Mie University's short-term program, Vietnam Field Study, both when it was conducted online and when it was implemented as an on-site program. Based on the results, we analyzed students' experiences and classified their motivation to participate in the on-site program, what they obtained in the online program and the on-site program. We also compared the differences in the experiences of the online program and the on-site one. As a result, while recognizing that the nature of the two types of program is different, we found that student's confidence, interest in the country, and interaction with Vietnamese students gained through the online program became their motivation and useful for the on-site program. It was also suggested that there is a need for reflection to solve limitations of the online program in order to use for the on-site program.

KEYWORDS:
COIL, On-site international learning program, Vietnam Field Study, Intercultural Collaborative Learning

---

†OKUDA Hisaharu* and MATSUOKA Chizuko*[2]:
The Significance and Possibility of the Online International Learning and On-site International Learning -A Case Study of Mie University Vietnam Field Study-
*Center for General Education, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan
*[2] Center for International Education and Research, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan